

鍋谷郁太郎著

『ドイツ社会民主党と地方の  
論理

— バイエルン社会民主党 1890～1906』

評者：石原 俊時

第二帝政期のドイツ社会民主党（SPD）に関しては、これまで夥しい数の研究が蓄積されてきた。本書は、その中において我が国初のバイエルン社会民主党（SPB）の本格的な研究ともいえる意欲作である。評者はスウェーデン社会経済史を専攻しており、ドイツ史やドイツ社会民主主義史が専門ではないが、本書は専門外の立場からも注目に値する書物であると考え、僭越ながら書評をお引き受けした次第である。

序章で著者は、SPBに注目する2つの理由を挙げている。第一に、「SPD内の路線や理論をめぐる対立や派閥の形成は、それぞれの党員の出身地方の社会状況を分析して初めて歴史的に判断がくだせる」のであり、「労働者の意識や行動様式というものとSPBの関係を地方を題材に取ることで初めて明らかにできる」と考えるからである。第二に、当時のSPDが、実は相対的に独立している各地方組織の緩やかな結合体でしかなかったことである。こうして著者は、SPDの実態やその発展の動態を理解するには、地方組織に焦点を置いた分析が不可欠と考え、SPBの指導者フォルマル、バイエルンの風土、邦議会でのSPBの活動という3つの柱を立てて、1890年から1906年までのSPBの全体像を解明しようとした。本書の構成は、以下の通り

である。

## 序章 研究史と課題

第1章 フォルマルによる問題提起とその波紋

第2章 「フォルマル路線」の形成過程

第3章 地方意識の中のバイエルン社会民主党

第4章 邦予算案賛同問題とバイエルン社会民主党

第5章 キリスト教とバイエルン社会民主党

第6章 バイエルン社会民主党の組織化過程

第7章 バイエルン政治の中の社会民主党  
— 1893年～1899年第8章 バイエルン政治の中の社会民主党  
— 1899年～1904年第9章 バイエルン政治の中の社会民主党  
— 1905年～1906年

終章 総括と展望

第一の柱として、著者は、SPBの独自の政策路線として「フォルマル路線」の成立過程を、最初の2章で辿っている。1890年のフォルマルの有名な「エルドラド演説」は翌年の党大会で大きな波紋を呼び、92年にはSPD指導部と「国家社会主義論争」を引き起こすこととなる。そして、「演説」に現れたフォルマルの独自の思想は、1892年の邦議会選挙に際して作成された「レーゲンスブルク選挙綱領」によってSPBの政策路線として結実していった。この「選挙綱領」に基づき、SPBは1894年に邦予算案に賛同したのだが、そのことでSPD指導部との間に再び論争が起こることとなる。第4章ではこの論争が扱われる。著者によれば、論争は、SPD内の「議会主義改良政党」路線と「革命的階級政党」路線の対立を反映していた。しかもビスマルク以後の政治情勢の中で事態は前者の優位に傾いていった。第5章では、宗教は私事としながらも本質的には宗教を認めぬ党指導部に対し、フォルマルを中心としたSPBが宗教の存在

を積極的に認め、宗教と社会主義の共存を主張していたことが指摘された。

著者によれば、こうしたSPD指導部とSPBの対立の背景には、国家観（第1章）や民衆観（第3章）の差が存在した。しかし、SPBの独自路線を生み出した背景には、何より「典型的な農業邦」でありカトリック信者が支配的であるという、バイエルの風土の特殊性があった。SPBは、カトリックが民衆の生活に根をおろしている地域で活動を展開しなければならなかったものであり、労働者のみではなく農民の支持を獲得せねばならなかったのである。このことが本書の分析の第二の柱となる。そのようなバイエルの特殊性の認識は、帝国においてはバイエルの「連邦主義」の主張、SPD内においては「党内連邦主義」の主張につながった。また、先に触れたように、宗教の存在を積極的に肯定する姿勢となって表れた（第5章）。

第三の柱は、邦議会でのSPBの活動である。先述したように、1892年に邦議会議員を送り込むことに成功したSPBは、「レーゲンスブルク選挙綱領」に基づき、邦予算案に賛成した（第2章）。また、邦の結社法による政治結社取締りの標的にされながらも中央指導部を置き、さらに1898年の結社法改正を契機として、中央指導部－ガウ－地区協会といった系統だった組織を整備するに至った。こうしてSPBは、指導部の下に党費によって運営される近代的政党に脱皮していった（第6章）。このような党組織整備は、バイエルンにおける大衆政治状況への移行を反映するものであった。そしてこの大衆政治状況は、名望家政治の時代に成立した邦議会選挙権規定の問題性を顕在化させた。第7章から第9章までは、1892年にSPBが邦議会選挙法改正案を提出してから、1906年に新しい邦議会選挙法が布告されるまでの過程を詳細に描き出している。その過程で一貫しているのは、現実

主義的で妥協をいとわず着実に成果をおさめようとするSPBの政治姿勢であった。一方、バイエルン中央党（BZP）は、従来のように選挙法改正に消極的な姿勢を維持できなくなった。また、1899年の邦議会選挙では初めてSPBとの選挙協力が実現し、戦果を収めた。それ以後、BZP内では、大衆政治状況に積極的に対応しようとする左派が台頭してきた（第7章）。こうして選挙権改革は、ついにはバイエルン政府も前向きな姿勢を示すに至って現実的なものとなっていったが、1903年に委員会案が自由主義政党・自由連合の反対で否決されると、SPB・BZP対自由主義政党・自由連合という対立の構図が鮮明となってくる（第8章）。1905年の邦議会選挙では、SPBとBZPの選挙協力がこれまで以上に大規模に展開され、「黒＝赤連合」の大勝利がもたらされた。こうして1906年に選挙権改革が実現することとなった。「フォーマル路線」は大きな成果をあげたわけである（第9章）。

本書によってフォーマルの思想や活動及びSPBの実態の解明が進んだことは、非常に重要な意義を持つと思われる。著者が主張するように、当該期のSPDの実態や発展のダイナミズムを理解するには、地方組織に焦点を置いた分析が不可欠なのであり、本書が我が国でのそうした研究に先鞭をつけたことは間違いないであろう。また、地方組織や地方に目を向けることは、ドイツ近代社会の多様性を浮き彫りにすることにつながり、第二帝政の歴史像を豊かにするのみならず、ナチズムを経て西ドイツに至る社会発展の歴史的前提を考える上でも重要なアプローチになるものと想像する。さらに、本書の意義は、ドイツ近代史・ドイツ社会主義史研究に留まらないと考える。フォーマルの妻が、スウェーデン人であったこともあり、スウェーデンの社会主義者にとって馴染み深

い存在であった。彼が、1885年にストックホルムで行った講演は当時の社会民主主義運動の動向に大きな影響を与え、その後の彼やSPBの活動も常に注目の的となった注)。恐らくヨーロッパの辺境にある農業国スウェーデンの社会民主主義者にとり、フォルマルやSPBの活動から学ぶものが多かったのではないと思われる。そのことから考えると、本書は、スウェーデン社会民主主義史や国際社会民主主義史研究にとっても貴重な貢献であると言える。

とはいえ、さらに詳しく知りたいと思う点が存在した。

著者は、バイエルン社会の特殊性がSPBの発展のあり方を規定したことを強調している。けれども、後進性（農業社会）やカトリックの支配だけでは改良主義的な社会民主主義の台頭は説明しえないように思える。担い手の社会経済的性格や思想的・文化的伝統との関わりもより深く考察すべきなのではないであろうか。また、政治勢力間の関係とその社会的背景についてもさらに詳細な分析が必要であろう。

SPDの革命主義路線を理解する上でも同様である。SPD指導部の思想や活動は、北ドイツ社会は、先進的（工業社会）で世俗化が進んでいたためであると単純には言えないであろう。また、何故に選挙権改革の闘争の中でSPBがBZPと協力しえたのかという問題がある。そもそもSPBは、宗教の存在を積極的に認めたとはいえ、国家と結びついた現行の教会には批判的であった。また、BZPの大衆政治状況への対応は、労働者階級の支持をめぐって、SPBとBZPが競合することを意味する。そもそもどうして自由主義政党でなくパートナーがBZPであったのだろうか。SPBがBZPと協力しえた理由は、第二帝政期のドイツでは一般的に自由主義勢力（市民層）と社会民主主義勢力（労働者階級）が敵対したのは何故かという問題に加えて、単な

る政治的対立の構図だけではなく、バイエルン（あるいはドイツ）の社会的・経済的・文化的特質との関連にも求めていかねばならないのではないだろうか。評者は、スウェーデンにおいては、社会民主主義労働運動における漸進的な社会改良路線の勝利にとって、市民層と労働者階級、自由主義と社会民主主義の協調的な関係の存在が極めて重要であったと考えている。社会民主主義の思想的展開を比較史的に捉えていくには、このような視角が必要となると思われる。

とはいえ、以上の点は本書の趣旨から逸脱した「ないものねだり」であるし、評者が門外漢であるせいもあって全く的外れであるかもしれない。評者としては、間違いのない意欲作である本書の公刊によって、ドイツ社会民主主義史研究や国際社会民主主義研究のさらなる展開が促されることを期待するばかりである。

注) フォルマルの講演とその反響については、拙著『市民社会と労働者文化』木鐸社 1996年、114 - 116頁を参照。例えば、スウェーデン社会民主党初代党首となるブランティングは、SPDの国家社会主義論争や修正主義論争などを紹介しつつ、フォルマルに対する親近感を示している。H.Branitig, "Striden Vollmar-Liebkecht", 1892, i: Hjalmar Branting, *Tal och skrifter i urval* I, Stockholm 1926; Dens., "Socialdemokratin, dess uppkomst och utveckling", 1909, s.147-153, i: *Tal och skrifter* II, Stockholm 1927. このようなフォルマルのスウェーデン社会民主主義への影響については、フォルマル研究の決定版とされるヤンセンによる伝記にも言及されていない。R.Jansen, Georg von Vollmar. Eine politische Bibliographie. Düsseldorf 1958.

(鍋谷郁太郎著『ドイツ社会民主党と地方の論理—バイエルン社会民主党1890～1906』東海大学出版会。2003年3月、xii + 287頁、定価6800円 + 税)

(いしはら・しゅんじ 東京大学大学院経済学  
研究科助教授)